

「悲観楽観悲運のサイド」脚本

田 浪 亜央江 訳

●第一部●

♪サーリヒーヤ（註：地名）へ、サーリハ（註：正しく適った道）で

♪ああ、出来立てのもちもちチーズ

♪持って来て、持って来て

♪ああ、真珠の首飾りを持って来て

♪あの人が私の身体に付けてくれたら……

♪私、あの人に何か話したかしら？

♪いいえ、絶対に

♪あの人が私に何か言ったかしら？

♪いいえ、絶対に

♪あの人のものに飛び込むわ

♪私、あの人に何か話したかしら？

♪いいえ、絶対に

♪あの人が私に何か言ったかしら？

♪いいえ、絶対に

♪あの人のものに飛び込むわ

（註：サイドが精神病院で歌っている戯れ歌なので、特に意味はない。世間の求める正しい道（サーリハ）と、ある特定の男性への恋情で揺れる娘の歌。舞台では即興的に別の歌になることもある）。

ようこそ、ドクター、ようこそ、ドクター。ご機嫌いかがですか？

ようこそ、ようこそ、ドクター。

「私の名において、また私と共にあるすべての者の名において

て、我が国の独立記念日を祝う素晴らしい機会を、我々に、また私個人に与えてくださり、ここに感謝の意を表すと共に、私を賛美する番組への協力を、毎年惜しまない所存であります」。

昔々のこと。

ねえ聴衆の皆さん、よい話が出来よう、まずは預言者に、祝福と平安あれ。

話しましょうか、それとも寝ます？

私はサイド・アップ・ナハス・アル・ムタシャーイル。

ID番号は2222 222。

生まれはイギリス委任統治時代。つまり私の父とチャーチルは、大の親友です。

しかし、チャーチルがこの国に長くはいないことを見て取ると、父はヤアクフ・サフサルチェック氏と友だちになった。そして、父は亡くなる前に私に言った。

「サイド、お前に対する不正は長きにわたるだろう。

お前にはサフサルチェック氏しかいない。

あの人がお前のことをよろしくやってくれる。

私のことをよろしくやってくれたのだから。怖れるのじゃないぞ」と。

私はここに、あなた方もここにいます。我々みんな、ここにいます。

私は消えてしまった、でも本当に消えたわけではない。大したことはない、私は大した人物ではない。私は士官でも村長でもない。

私はウェイターです。大した人物ではない。

しかし私がいなければ、料理はないし、料理には平和がない。私は持って来て運び去る。

行って、持ってくる。持ってきて、運び去る。そして、誰かを待つ。

だって、私は自分の運命を生きたい。

私は消えてしまった、しかし死んではいけない。

私は宇宙人の紳士に会いました。スローモーションのように近づいてきて、彼は言いつた、私は君たちと一緒にいるのだ、と。私は変装して、あなた方と一緒にいる。でも隠れてはい

ないんです。驚きましたか？ その通り、イスラエルでの私の生活は、万事驚くことばかり。

一九四七年の出来事当時、私と父は、ロバの上に乗っていました。アッカに向かって、トッコ、トッコ、トッコ。

これは我々の「国産マルセデス」。

辻道では何も起こらなかったが、突然「ダダダダダーン」。

我々に向かって撃ってきた。父は撃たれ、ロバから落ち、私はロバの後ろに隠れた。ロバは撃たれて、私は助かった。

つまり、イスラエルにおける私の生活は、すべてロバのおかげ。私の名前は、まさに体を現してます。

私の起源は、アレツポ出身のキプロス人奴隷女に遡る。

タイムールが彼女を生かしておいたんです。骸骨のピラミッドは、面積二十キロ平方メートル、高さ十メートルもあつたけど、彼女が頭を置く場所はもうなかったから。

タイムールは自分の軍の騎士を一人付けて、彼女をバグダードへ送った。お風呂に入つて身を調べ、タイムールを待つべく。どうしてだかは、知りません。

ところが彼女は逃げちゃつた。ウスノロウ族のアラブ出身のベドウィンと一緒に。

男の名はアブジャル。このアブジャルこそ、私の一番古いご先祖様。

アブジャルは、彼女と離別した。彼女が別の男とよろしくやつてたので。ジャフタリクの洞穴で、バコバコと。

男の名はラギーフ・イブン・オムラ。この男も彼女と離別した。

別の男と、バコバコやつてたから。そいつの名前は知りません。このようにして、我らがご先祖爺様方は、ご先祖婆様方を離婚しつづけた。

そうやって、イスラエル国家建国に至るわけ。

その時にこそ、第一のナハス^{不運}が現れた。

四八年にはビッグなやつひとつ、それからスモールな不幸の数々が現れた。

最近の例はオスロだ。

(註：一九九三年の「オスロ和平合意」のこと)

その時、わが一族の者たちは、イスラエル近隣のアラブ諸国にバラバラになつた。

そこは「まだ」イスラエルが占領をしていないから。

私にはヨルダンに従兄弟がいて、そいつは大臣になつた。

キングサイズのライターを差し出して点ける、ライター大臣に任命されたんです。

シリアには我々の一族出の校長がいる。

イラクにもすごいのがいるし、レバノンには士官がいる。

しかしこの士官は、アントラーニツク銀行が倒産したとき、心臟麻痺で死んじゃつた。

それから、イスラエル政府に任命された最初のアラブ人も我々の一族の者。

「北ガリラヤ地域ガム・ほうれん草・パセリ流通委員会」の委員長として！

しかし皆が、彼の母親は離婚されたチエルケス人だと噂し合つた。

それから私の父——彼にアツラーのご加護あれ！——、はまだ出来る前のイスラエル国家に、すごい恩人を持つていた。

その恩人は、父には忘れられないお方。

その方こそは、ヤアコブ・サフサーフチェックさん。

父がロバと一緒に撃たれた時、——神よ、その一人と一匹にご

慈悲を――、
私はアッカへ向かう海沿いの道を進みました。

海は広いな、指揮官様。

海は今や、人の山。

海岸には、銃弾と裏切り。

救援ボートは人で一杯。

海は広いが、裏切り者。

ユダヤ人もまた然り。

子どもたちは、沈んでゆく、沈んでゆく、沈んでゆく……

アッカで私は、着の身着のままの人々に会いました。

私も着の身着のまま、レバノンまで逃げました。

自分の肌着まで売って生計を求めるも、ついに売るものすべて、
すってんてん。

連中は言った、「難民どもよ、自国を売った者どもよ。難民ど

もよ、自国を売った者どもよ」。

私も言いました。

「あなたの皺を刻んだのは、祖国の土にほかならぬ。ならば潜
入し、イスラエルに戻るよりほかありはせぬ」。

聞いてください、皆さん。

レバノンのスールで、私はアーデル医師に会いました。

このアーデル医師は、アラブ救援軍のメンバーだ。

この軍は四八年に我々を救援してのち、いまだに救援しつづけ
てくださってる。

このアーデル医師、甘いマスクの長身の男。

ピカピカの金歯をお持ちで、それは後に、もっと大きくなった。

パレスチナ時代、彼の診療所はワーディー・サリーブにあった。

ハイファの娘たちは皆、彼の診療所に足繁く向かっていった。

私ノ妹モ、ソノ中ニイタ！

さて、彼がアラブ救援軍で働いているのを知って、イスラエル

に潜入したいと言ってみた。

秘密を守るか？ と訊ねられたので、もちろんですよ兄貴、

と答えた。

彼はさらに曰く、「舌を慎め、お前の舌は長いから」と。じゃ

あ切つて差し上げましょう、と言つてやった。

聞いてください、皆さん。

私たちはアーデル医師の車に乗りました。

私は彼の隣に座り、妹は後ろの席に座りました。

私は鏡に映るアーデル医師をそっと見つつ、見ていないふり、

見ないふり。

テール・シーハに着いたのは、ちょうど日没時。住民も、沈む

瀬にいた。

軍人の「ストップ！」で止まった。

アーデル医師が彼らと何を話したか、神だけがご存知。

「お前たちには指令がある」

医師がポケットから何やら紙片を出すと、彼らは医師に愛想を言い、医師は彼らを笑い嘲った。

彼らも笑い嘲ったが、私は恐怖で凍りついた。

その夜、私たちはマアリヤーに泊まった。

アーデル医師の友人宅の、新婚さんです。

どうして新婚さんだか分かったかって？

こんなふうにお互い見つめ合っているんです。

実際のところ皆さん、明け方私はアーデル医師のベッドから

聞こえてくるひそひそ声で目を覚ましました。

女性の声が聞こえてくる。

息をひそめると聞こえた、「心配しないで。亭主は今留守なん

だから」。

私は安心して、再び長い眠りにつきました。だって私の妹には、

そもそも夫がいないのだから。

二日目、アブー・シナンでお昼をとりました。

ドクターの父親の、今は跡形無き家で。

お昼の後、彼らは私のためにロバを借りてくれ、コフル・ヤー

シーフまでそいつに乗っていきました。

一九四八年八月、ロバの背の上で、私は二十四歳になりました。

ハッピーバースデー トゥーユー

ハッピーバースデー トゥーユー

ハッピーバースデー

ハッピーバースデー

ハッピーバースデー

ヤー、サーイド。

(フリーー)

私はコフル・ヤーシーフで道を訊ね、軍事政府庁の場所を教え

てもらいました。

以前は高校だった建物です。

ロバに乗ったまま、向かいました。

三等のロバの上。

兵士が急行し、武器を構える。

「ロバから降りたまえ」

「吾が輩はサイド・アブー・アル・ナス・アル・ムタシャール

である。

吾が輩がロバより降りるのは、サフサルチェック氏に対面つ

かまつる時に限られる」

「間抜けロバめ。ロバから降りなさい」

「吾が輩は、その父をサフサルチェック氏の友とするもので

ある」。

「手前の父親がサフサルチェックの父親を呪うがいい。

ロバから降りよ。私は軍事政府長官アブー・イツハクだ」。

降りましたヨ……。それから軍事政府長官アブー・イツハクを

眺めてみました。

ロバの背丈を抜きにしても、彼は私より背が低い。何だかとても嬉しくなった。

学童用の椅子に座りました。

彼のほうは、電話で意味不明の言葉を話し始めたが、私にはチンパンカンパンだった、二つの言葉を除いては。

サフサールチェック。サイド。

ところで、あなたがたはご存知ですか、ムタシャールの意味するものが何かを。

(註：ここで会場が「ラー」と反応するのがお決まりのようだ。)

ムタシャールとは、二つの語から成っております。

すなわちムタシヤールム、ムタフアール。

このムタシャールという姓は、我々の一族で最初に女が離婚された日に溯る。

すなわち、あのキプロスの奴隷女、皆さんにお話しした、私のご先祖婆様です。

例えば私は、朝まず「神に讃えあれ」で起きます。

だつて神が、寝ている間に私をお召しにはならなかったのだから。

昼間私に何か悪いことが起きてても、「神に讃えあれ」。もっと悪いことは起きなかったわけ。

私の母——神が彼女をお護りくださいますよう——も、ムタシャールの家系の出です。

我々は皆、彼女から分かれ出たのですから。

私の兄——神が彼をお護りくださいますよう——は、「ポート」つまりハイファ港で働いて、ウインチに就いていた。

ある日のこと、ウインチが彼を打ちのめし、彼は波に吞まれてしまった。

バラバラになった身体が、毛布の上に集められ、私たちのところに運び込まれた。

兄は新婚一ヶ月だった。

とにかく彼を埋葬して戻りました。

人びとがやって来て、儀式に加わった。

アラブってのは、一人が死ぬと皆が死んだようになる。

母が何をしたと思います？ 手の平をパチパチやっこう言った。

「神に称えあれ。主よ、称えあれ。こういうことになって良かった。違うことじゃなくて」。

未亡人になった義兄は、母に飛びかかった。

「これより酷いことつてある!? ナハスの婆さん？」

「あなたが、あの子の生きているうちに何方知れずになることさ、色黒さん」

実際、彼女は二年後に駆け落ちしました。

相手はイルブーン村出身の男ですが、後でインボだと分かった

とか。

母はやつぱり同じ調子でした。

「こういうことになって良かった。違うことじゃなくて」。

私たちは何者でしょう、楽観的人間？ 悲観的人間？

同じことです！

我々の抛り所、軍政府長官アブー・イツハクに戻りましょう。チンブンカンブンの話を電話を終えて戻ると、私をジープの彼の隣に座らせ、アクセルをフルに踏みました。

皆さん、聞いてください。

アッカに着く手前、マクル村の脇で、アブー・イツハクはブレーキを踏み、そのときようやく、私は彼のほうを見ました。埃っぽい長衣が、平原をかすめました。

アブー・イツハクは銃を持ってジープを飛び降りた。

ゴマの木の枝の間から、手に小さな子どもを抱えた女が見えました。

彼らの目だけが大きく見開かれていました。

「どこから来た？ 言え、さもないと撃つぞ」

皆さん、彼は銃を子どもの頭の方に向けました。私のほうはま

だ正気です。

一瞬、私は彼を撃ち殺したいと思ったが、そうすることはありませんでした。

「どこからお出でだね？」

「私はベルウエからです、旦那」

「で、ベルウエへ戻るわけか」

「ああ、旦那……ああ、旦那……。私には頼る者が誰もいません、旦那。どこに行けと言うのでしょうか、旦那」

「戻ることは禁止だと言わなかったか？ お前たちは秩序も法律も知らないのか。行け、行くんのだ」

女は立ち上がり、子どもの手を取ると、東に向かいました。

太陽が沈んで行くところでした。

女と子どもが歩き、遠ざかる。

遠ざかるにつれて、大きくなる。彼らの影は、次第にどんどん大きくなる。

彼らの頭は空にぶつかりそうなほど。

私には、辺りは一度に暗くなったように感じました。

こんなふうにして、私は宇宙人からの最初の交信を受け取ったのです。

「いつあいつらはいつべんに消えるのだろうか？」

こう言ったのはアブー・イツハクでした……

私に尋ねているのか？ いや、彼は一人言を言っていたのでした。
アブー・イツハクはジープに乗ると、私をアツカに引っ張って
いきました。

アツカよ、心の恋人、アツカ。

アツカは私の高校。

そしてユアードは私の初恋の相手。

愛を求める心は変わったとしても、はじめての恋人への愛にま
さる愛なし。

一生のうち、男がいくつの家に住もうと、彼が憧憬するのは、
最初の家。

どうしてユアードを好きになったか？

朝六時半にハイファを出てベイルートに向かう列車に、ユア
ードと私たちは同乗していました。

彼女はアツカ女子学院に通っていました。階上にあるいい正門
がある学校です。

私はアツカ男子学院に通っていました。

さて、彼女は毎日、私たちと一緒にハイファから列車に乗って
いた。

目の周りをこんなふう塗りに塗りたいと思った、今どきの娘たちとは違

う。

やって来るといつも、一番最後の車両に座った。

私もまっしぐらに進むと、彼女の近くに座った。

私が見上げると、彼女も見上げ、笑いかけると、笑ってくれた。

あまり日も経たないうち、ある朝、

「こっちに来て、この英語の言葉、訳して下さいませんか？」

私のほうは、「Something、Something……」

って英語で。つまり、何とかかんとか、と。

私は自分の無知に顔を赤らめましたが、大したことじゃないわ、
いいから座ってよ、と彼女が言うから、座りました。

その日から私は彼女と同席することになりました。

行きも帰りも。

ハイファ、アツカ、アツカ、ハイファ。列車の中のほろ苦い秘
密。

好きになりました。

そして彼女も私のことを……、ものすごく。

愉快で面白いから好きなのよ、と彼女は言いました。それに大
声で笑うから。

つまり正しく述べるなら、私は哄笑の大家だと。

さて、そこにしゃしゃり出たのが私のクラスメート。我慢のな
らない嫌な奴。

つまり私を妬み、憎悪して、何とアツカ女子学院の校長と密

談！

アッカ女子学院の校長はいきり立ち、私たちの学校長たるルウーフ先生——アッラーが彼をお守り下さいますよう——に速達を送った。

ルウーフ先生、ハイファ列車組の生徒全員を集めて演説なさった。

「ハイファとアッカの間には、海がある！ だから、イブン・ナハス君、ハイファで許されることも、アッカでは許されないのだ。

アッカは、サラーフ・ツデーイン・アル・アイユービーの時代以来の、保守的な町である。

アッカに置かれた時計台によって記念されているのは、著名な故アブー・アル・ハサン・アハマド・ブン・ジャバル・アル・カナシー・アル・アンダルシー・アッシャーティービー・アル・バルナシー、——これは一人の人間の名前である。

この人物はサラーフ・ツデーインの時代にアッカに二晩宿泊されたのだ！

そして彼は、アッカに関してこのように書いています。

アッカには異端と不信仰が渦巻いており、そして汚穢と罪科に満ちている、と。

私の祖父、つまり私の父の父を思い出す。

最初の妻に逃げられてしまった。そのことを幼い我々に話したものだ。あれがあんなだったのは、アッカの出だからだ。そう

繰り返していたものだ」

私はルウーフ先生の前に躍り出て、ルウーフ先生にこう言った。「でもユアードはアッカの出身じゃありません。

ユアードはハイファから来ているんですから」。

先生は私の耳をつまみ上げ、私を教室から放り出しました。

そして彼女の家族に手紙を送った。

この人びとは怠慢ではないから、さっそく私のところに彼女の従兄弟たちを送り込んで、列車の駅でパンチをお見舞いしてくれました。

私は腫れた顔をして帰った。

しかしユアードへの愛情は、二倍に増強。

ところがユアードは二度と再び戻らず。

二度と彼女を見ることはなく。

しかし私の心の髄に残り続け、心髄に残り続け、心の髄の髄の髄に、残った。

ひゆるるうゝ。

我々の拠り所、軍事政府長官アブー・イツハク殿に戻りましょう。

アブー・イツハクは私を、西の方に連れて行った。

海岸だが、サンフランシスコとはいかない。西の方にある警察署へ。

そして私を一人の士官に預けた。

この士官は、東欧系のユダヤ人でした。

「お前はヘブライ語を話せるか」

「私は……、ここアッカでは誰も知りません。ルウーフ先生以外は」

つまり、校長先生です。

誰が知るか、あのことの顛末を……。

東欧系ユダヤ人士官とアブ・イツハクともう一人は、私をジャッザール・モスクへ連れて行った。

ジャッザール・モスクに着いた時、すでに満月の明かりに満ちていました。

アブ・イツハクは私にモスクの階段を昇らせ、モスクの北側の門に着きました。

アブ・イツハクは三回扉を叩きました。

私はモスクの近くで、人の叫び声を聞きました。

それから小さな娘の泣き声を聞きました。

誰かが彼女の口を押さえて、黙らせた様子。

それから、遠くから二人の男の声が聞こえ、それはだんだん近づいていました。

扉が開かれました。

「アーロー、ツサラム・アレイコム」

「先生、さらにもう一人、明日朝七に警察署で身元確認の必要

な人間が出てきました」

「こんにちは」

「こんにちは。入りなさい。……サイドだね」

「ルウーフ先生、校長先生。サイドです、先生。

父は私に、先生のご慈悲に頼りなさいと言っていました」

「私の慈悲心はまことに篤いのじゃ。ここにお入りなさい」

私は心の中で言いました。

「こんなことのために私をユアードから引き裂いたのですか。

「ハイファとアッカには海がある」

しかし彼には聞こえない。

「皆さん、自分の仕事に戻ってください。こちらは我々の仲間です」

人々はモスクの中心に集まり、あらゆる方向から私の周りに集まりました。

「こんにちは」

「こんにちは」

「どちらから？」

「どうやってここまで来たんですか？」

「潜入者か、スパイかも知れない」

「どこの村から来たんだね？」

「皆さん気をつけなさい」

「皆さん、この人にお気をつけなさいよ」

「およしよ、みんな。この人も夢破れた若者に過ぎないじゃな

いか」

「私たちはクウェイカートの出だが、破壊されて住民がみんな北に逃げた。クウェイカートの者を誰か見なかったかい？」

「私はマンシーヤの者だがね、マンシーヤの人間を見なかったかい？」

「我々はアムハーの出さ。火をつけられてね。連中が油を撒いたんだよ。」

アムハーの者を誰か、見かけなかったかい？」

「私はベルウエの出だが、もうあそこには教会しか残っていない。」

ベルウエの者を誰か見かけたかい？」

「ああ見たさ。小さな子どもを抱えた女の一人。マクル村の脇で、ゴマの木の茂みに隠れていた。」

アプー・イツハクが彼らを撃ったんです」

人々はモスクの真ん中に集まり、その女性は誰かと当て推量しました。

おそらく四十、五十の名前を出しました。誰その母、誰その母、と。

隅に座っていた男がタバコを巻きながら、言いました。「よろしい、『ベルウエの母』だ。皆さん、その人は『ベルウエの母』ですよ。」

♪唯一にして偉大なる、強壮にして威を振るわれるアツラーの名において

♪あああたしの、あああの財産まるごと
♪連中、クウェイカートを木つ端微塵にしちまった

♪あああたしの、ああ財産まるごと
♪次にベルウエの番が来た

♪あああたしの、ああ財産まるごと
♪デール・ル・カーシー、忘れガータシー

♪あああたしの、ああ財産まるごと
♪ザイブは全部、オオカミの住み処さ

♪あああたしの、あああの財産まるごと
♪ソフマータ、サフサーフ

♪あああたしの、ああ財産まるごと
♪それからミール、シッタ・ル・デール

♪あああたしの、ああ財産まるごと
♪えーと、エートセトラ

♪あああたしの、ああ財産まるごと
♪どうして数え上げられるものよ

♪あああたしの、ああ財産まるごと

これらは皆、一九四八年に破壊された私たちの村の、ほんのほんの一部です。

「先生、ここで先生は何をしているんです？」

「離れ離れになった家族を再統合しているのだ。」

実際のところ、息子よ、連中が我々の村を破壊し、その住民を追い出したのは事実だ。

しかし、過去の侵略で我々の子孫が味わうことのなかった慈悲心が、連中の心にはある」

「先生の言葉はまるで甘い蜜ですね。どうということか、説明してくださいますか？」

「息子よ、こういう例を考えてみよ。」

歴史の授業で教えたように、マルウーン將軍がアッカ王国の砦を包囲した際、その住民二千六百の首を切り、この將軍はアリエーニと呼べられた」。

「ほおーつ。すると、イスラエル軍のアルーフという階級は、これが起源なのですか？」

「とんでもない、息子よ。ウルーフという階級は、トーラーの千の部隊に由来する。」

彼らは国家を持たず、二千年の不在の後に祖国に戻ってきたのだ」

「連中の記憶力ときたら、何てすごいでしょね、先生」

「連中がやって来た。やって来たぞ」

突然、モスクの門の辺りでがやがやとした音が聞こえ、外でこう言っているのが聞こえました。

「全員外に出ろ。自分の村に戻るのだ。」

全員外に出ろ。自分の村に戻るのだ。」

サイドと先生だけは残れ」。

人びとは、モスクの真ん中に集まった。

このシユクリーヤという女は、口を押さえて自分の娘を窒息させちまったのだ。

彼女は自分の娘を抱え、真つ暗い市場の方に向かう東門から逃げてゆく。

「どこへ行くんです？」

「明日、この子を私の母の脇に葬るさ。あとはアッラーの御心に委ねるさ」

南門から逃げる人々もいました。

「どこへ行くんです。連中はあなた方を故郷に戻そうとしているんじゃないませんか」

「わしらは逃げて来たんじゃない。わしらの村を破壊した人間が、わしらをあそこに戻すわけがない。」

わしらには、面倒を見てくれるヤアクーフ・サフサルチェックさんはいないのさ、お前さんみたいに。」

まったくさ。連中はわしらを皆殺しにするんじゃないよ」

モスクにとどまった者たちは、自分の荷物を抱え、子どもを連れ、モスクの中央の扉から出て行きました。

イスラエル国防軍の兵士が、彼らを待ち受けています。

彼らをトラックで運び出し、北方に捨て去った。」

今日に至まで、彼らはレバノンやシリアの難民キャンプ生活というわけ。

私とルーフ先生は、モスクで二人きりになりました。

「さあもう寝なさい、息子よ」

「眠くならないんです」

いなくなった人々の状態に比べ、私の状態は満足できるものだと思います。

軍が行方不明に出来なかった人々は、運ばれて行き、行方不明にされている。

祖国でじつと抵抗すること、これはすべて父の友だちチャアクー・サフサールチェックのおかげなのでしょう？

彼は何でも叶えてくれる、魔神の指輪なのでしょう？

それはアラジンの魔法のランプなのでしょう？

祖国における私の抵抗の裏には、秘密がある。

私はあなた方に、この秘密について話す準備があります。

もしも皆さん方のどなたから、タバコを一本頂けるのであれば。

(註：ここで観客席から誰かがタバコを差し出すと盛り上がる)

祖国における私の抵抗の秘密とは何か？

私の一族の誕生以来慣習として、頭を両足の間に入れて歩き続けています！

だから何だと聞くんですか？

私を知るわけありませんよ。

彼らは、自分たちの人生を変えてしまう宝物を、両足の間から探しているのです。

私にはかつて伯父さんがいました——アッラーが彼に慈悲を差し伸べらんことを——。

トルコの支配の時代のこと。

ある時、出かけましたが、頭をどこへやったと思います？

両足の間に入れて、てく、てく、てく、てく、てく、てく。

頭が古い壁にぶつかった。

壁に穴を開けた。覗いて、入り口を開けた。

口から覗くと、洞穴に続く階段にぶち当たった。

闇の中、階段を降りた。ライターを点けた。

トコ、トコ、トコ、トコ。

洞穴の広場に着いた。そして墓場に出くわした。

墓を開けると、金の首飾りと骨が見えた。

服の切れ端に埋もれていた。

何とまあ、その大ききの素晴らしいこと。

もう一つ墓を開けると、そこには小さな骸骨。

道は分からなくなっていました。

彼は自分の妻に向かって叫び始めました。自分の家は自分の頭

上にあるはずだから。

彼の叫び声を、ともかくも彼の妻は聞いた。

彼は自分がどこにいるのか話した。

入り口からどうやって自分のところへ降りるのかを説明した。

その口が洞穴につながっていると。

それから彼女に、自分の父の墓にかけて誓わせた、この秘密を

誰にも漏らさないよ。

兄弟にも、いとこにも、父親にさえも。

ライターを持って来いと妻に言った。

妻は立ちあがって、探した。

しかし入り口にも、壁にも出くわさない。

彼女は家に戻り、頭をソファの下に置き、夫に向かって叫んだ。

「あんた、ねえサイド。ねえあんた、どこだい、どこにいるんだい。」

まったく、どの入り口だか、どの壁だか、どのスイカだか」

「神がお前の父さんの墓を呪えばいい。海も干え上がればい

い」

我を試したかの人間を、神が試まれるよう。

早起きは三文の得、朝になれば帰り道も分かるというもの。

しかしかえって一層、妻が誰かに話すことを警戒した。

「結構、結構、自分の宗教を呪うがよい」

朝が来た。辺り一面が、明らかに……

——ならなかった。辺り一帯、暗いまま。

サイド伯父は上がって来なかった。

その妻は心配になり、伯父さんの兄弟に話した。

兄弟たちは立ち上がって、両足の間に頭を入れて探した。

彼らは怖れ、政府には告げなかった。

最善の道は、モンケ・ハーンの宝物を奪うことだ。

両足の間から、それを探しつづけた。

トルコの時代、イギリスの時代から、イスラエル国家成立まで。

今日に至るまで、両足の間から探しつづけている。

だから私は、両足の間で自分の人生を探しているんです。

両足の間に何があるのか、ちゃんと分かっている。

地面の上を歩き続けました。

両足を地にして、頭を空にして待つ。

宇宙の人々がきつとやって来て、私の人生を変えてくれること

を。

この人生は、タマネギの皮と同じとはいかない。

名誉への情熱がなかったら、人間の生活って何でしょう。

皆さん。

私は朝方に、ジャツザール・モスタを出た。

アッカの路地をうろろろし始め、太陽が沈むまで、うろろろし

て探しました。

遠くから光が出てくるのが見えました。

点っては滅する。

点っては滅する。

アラビア語の先生の左目のことを、ピピッと思い出した。

あの、ぴくぴく点滅していた目。

初めてこの先生に教わった時、私に目配せして黒板まで呼んでいるのかと思った。

おい黒板野郎、席に戻れ、と言われた。

私は黒板のところで立っていた。

でも、おい黒板野郎、席に戻れ、とは言われない。

点滅している光の方へ進みつづけ、ファーフォーラ地区までやって来ていた。

灯台の光だと思っていたのが、この光だったんだ。

「サイド、おいサイド。こつちに来なさい」

灯台の真ん中から、背の高い老人が私を見ていた。

灯台よりも背が高く、青白い長衣を着ている。

それはまるで、月の光に照らされた海の波のような色。

彼が近づき、私も近づく。

彼が近づき、私も近づく。

ファーフォーラ地区の壊れた城壁の真ん中で、私たちは出会いました。

恐怖のあまり、彼の手に接吻をしようとした。

しかし彼が自分の手を伸ばしたので、私はその手を握りしめた。人生で初めて、安らぎを感じました。

「私のことを探していたのではなかったかね、サイド？」

「生まれてこのかた、ずっとです、旦那様。

ついにいらしたんですね？」

「我々は一度たりともお前たちから離れたことはない。お前たちがやって来るのじゃ。ふむ……、何をして欲しいのじゃ、サイド？」

「私を救い出してください」

「誰からじゃ？」

私は自分の手を引つめました。父の言葉を思い出したからです。

一生誰も信じるな。

軍事政府長官は、お前にスパイを送ってくるかも知れない。

「旦那様は何とお名前ですか？」

「我々はこれまで一度も、名で呼び合つたことがないのだ。

しかしお望みなら、私を救い手と呼びなさい」

「では、私を救い出して下さいな」

「お前は自らを救い出すのだ。

自分の人生を何とか出来ないのであれば、それはタマネギの皮ほどの意味もない。

それに、救済の代価を支払えないのではないか？ 私のことを

思い出し、やって来るのは高くつくからな。

……不運な奴め。私はお前以外の人間も見ているが、お前については非常に不愉快だ。

何が不足なのだ。身を案じれば、死から免れるとでもいうの

か?」

「へ、へエ……。私は明日ハイファ、つまり我が故郷に戻ります。

私がどうしたらいいか、ご忠告を何かいただけますか、旦那様?」

「私の忠告はお前にとつて有益ではなからう。

しかし私はお前に次の話を聞かせたい。

ペルシャの国のある森に、斧が投げ捨てられていた。

しかし、手で持つところ、つまり柄がない。

木々は怖れ、この斧がここにあるのは良からぬと言った。

一番小さい木が慌てて言うには、『怖れることはないですよ、

ねえ大木さんたち。

その穴に入り込んでいるわけではないのなら』」

「フウム……。良く分かりませんが。」

いつ旦那様にもう一度お会いできるのでしょう?」

「いつでも、お前が望む時に、ここに会いに来なさい」

「何時に?」

「疲労困憊したときに。サイド、疲労困憊したときに」

「旦那様、旦那様、旦那様……」。

世間は朝を迎えた。

七時に、私は自分の身元を警察署ではつきりさせなくてはならない。

まったく、六時半から警察署の前でうずくまっていた。

七時数分前。

私は中に入り、長官について尋ねました。

連中は私のことを、紅茶一杯つきりで午後四時まで放っておいた。

四時になって一人の兵士がやって来た。

私を軍用ジープに乗せました。車体全体が汚れていた。

私を彼と同乗させ、彼に同行させた。

いざハイファへ、父の友人、ヤアクーフ・サフサールチェック

の元へ。

しかし私を連れて行ったのはヤアクーフならぬヤアコブの元で、

彼が私によこしたのは、軍の制服だった。

トーツ、トーツ、トルコ帽

ト「ここに接吻し給え」

トそれで私に10リラくれたんだ

ト花婿さんにトルコ帽かぶせた

トトーツ、トーツ、トルコ帽

ト取れよ祝えよ、いい子ちゃん

ト取れよ祝えよ、いい子ちゃん

ト「お前の父さんは我々に大貢献した」

トトーツ、トーツ、トルコ帽

ト豚肉だって食べるようになった

♪つまりナクニーク、つまりソーセージ

♪豚肉だって食べるようになった

♪豚肉だって食べるようになった

♪ロスチャイルド卿の豚を

♪トーツ、トーツ、トルコ帽

♪私に新しい家を探してくれた

♪私に新しい家を探してくれた

♪アラブ人住宅から

♪トーツ、トーツ、トルコ帽

ヤアコブは私をパレスチナ労働者協会の書記長に指名しました。
今で言う、労働党のヒスタドルートの前身。

そして私に家を見つけてくれた。
ワーディー・ニスナーズの、空き家になったアラブ人住宅の中
から。

こうしたアラブ人住宅は、セメントで封鎖され、「不在敵対者
の財産」と呼ばれた。
つまりラホーシユ・ナートーシユ。

私は家に家具を入れたいと思い、空き家になったアラブ人住宅
に入った。

その隅から、ここからテーブル、そこから椅子。
あちらからクッション。

皆さん。私は自分が入った家で、コーヒーの注がれたカップを

見つけました。

その住民は飲む間もなく去ったのです。

私はコーヒーを飲んで、カップをポケットに入れました。

♪家を得て、住めるようにした。

♪共産党員どもの不興を買った。

♪連中の新聞は書きたてた。

♪トーツ、トーツ、トルコ帽

♪つまり「統一」紙上にさ。

♪重要人物になった気分。

♪共産党員どもが私のことを書いた。

♪トーツ、トーツ、トルコ帽

さて、皆さんに言いました通り、ヤアコブは私を労働者の書記
長に指名し、私のことが新聞に書きたてられました。

こんなふうに新聞に書かれる以上、自分はもう無用な者ではな
いと感じた次第。
突然全身に勇気が充満した。バナナ・リンゴ・ブドウ混成ビタミ
ンCパワー！

それで思い出したのが自分の家のこと。

私たちの家は、ハイファの入り口の、カトリック教会の近くに
ありました。

森が背に追ってきます。

タクシーではなく、バスに乗りました。

トーツ、トーツ、トルコ帽

バスから降りて、あぜ道を渡った。

電車に轢かれるよりは、まし。もだえ苦しんで死ぬよりは。

……私たちの家が見えてきました。

ウンム・アスアド伯母をじつと見つめました。

中年の女性です。

彼女は、私が小さい頃からカソリック教会を掃いていて、今も

こうして掃いている。私は神を称えました。

彼女を手を引いて、接吻した。

彼女は私を、統計局の人間と思っただらしい。

その職員は、私たちに残されたものを登録している。

彼女は自分の手を引き、こう言います。

「あたしはもうキョセイ済みですよ、旦那。あたしに何を指望
みて？」

毎度毎度、あたしをキョセイに入れたいんですか？ あたしは

もう、キョセイ済み、去勢済み。

牧師様があたしをキョセイに入れた。

言っておきますけどね、あたしやもうキョセイ済み。去勢済み。

牧師様があたしをキョセイに入れた。

それから國中あちこちを去勢しちまった」

（註：「統計」がなまって「去勢」と発音されている）

「僕はサイドだよ、伯母さん。忘れたの？」

「どのサイドかえ？」

「イブン・アル・ナハス」

「イブン・アル・ナハス。どこにいたんだい、坊や。どこに
さ？」

抱きしめて、受け入れてもらいました。

「お母さんは元気かい、坊や？ 牛乳は、相変わらず水で薄め
て売ってるのかい？」

「伯母さん、僕らの家はどうなった？」

「住んじまったよ」

「誰が？」

「ユダヤ人が」

「連中と知り合いになった？」

「アッラーが連中の家を破壊し給わんことを。連中はみんな同
じ顔してるんだよ」

「もし僕が行って扉を叩いたら、連中は僕を中に入れてくれて、
家がどうなったかを見せてくれるかな、伯母さん？」

「お前の言う通りだよ、いい子。コーヒーを入れてあげるから、
お行き」

「すまないけど、また今度に」

伯母さんの手に接吻して、我が家を見に行った。

洗濯物の紐がかかっているのに出くわした。

私はあえて、入ろうとはしなかった。

海岸を散歩しているふりをした。

行きつ戻りつ、行きつ戻りつ。

家から女が出てきて、私を見た。誰かと話している。

男が出てきた。多分、彼女の夫だ。

妻と一緒に、洗濯物をたたんでいる。

一体どこに、洗濯物をたたむ男なんているだろう！？

明らかに、これには異がある。

連中が何をしたいのか分からないが、逃げました。

(註：ここでは男が家事をすることのない、アラブの伝統社会との対比が暗示されている)。

私は歩きを早めました。バスに間に合うように。

道路で、私はユダヤ人の労働者を見た。

彼らがユダヤ人だと、どうして分かったか？

みんなカーキ色の服を着ていたからです。

ところで今、何時だろうか。

ヘブライ語で「何時？」とは何と言う。

そうだ、マーシャアー。

「マーシャアー？」

「アハト」

「アハト？」

アハトというのは、ドイツ語で八のことだ。

私はワーディニスナスの方へ歩きながら、

ヘブライ語を覚えなくては、と考えた。

のろろしてはいられない、と。

実際のところ、十年後、

ヘブライ語ではじめて演説を致しました。

ハイファ市長の前で。

私の演説は市報に載った。

それでまた、共産党員どもは私を罵倒したつけ！(笑)

これで第一部はおしまい

(休憩)

● 第二部 ●

五〇年代の、ある春のこと。

ジスル・ザルカーに魚釣りに行きました。

それは海岸沿いにある、全く変わった村なんです。

ジスル・ザルカーとファラーデイスが、どうやって持ちこた

えたかと思いません？

ハイファ・ヤーファの間では、一番小さい村なのに。

アッティーラ、コフル・ラーム、ジャバア、イクザム、サル

ファンド、ウンム・ハリド、北ジャヤデーダ、南ジャヤデー

ダ。

ヒルバ・ザバーバダ、ヒルバ・ルブルジュ、タントウーラ。
キーサーリヤー、アイン・ハウド、アイン・ガザール、ザンマ
リーン。

これらはすべて、一度で破壊されたんです。

ファラーデイスとジスル・ザルカーを除いて、みな。

ファラーデイスはヤアコブを必要としていた。

例の父の友人、ヤアクーフ・サフサールチェックではなくて、

ヤアコブ・ド・ロツチェルのことです。

このお方はイギリスの百万長者。

ズイカロン・ヤアコブの町を建設した、けちん坊。

ズイカロン・ヤアコブの住民は皆、ヨーロッパから着た東欧系

ユダヤ人。

ワインを醸造して売った。

ルブウナルハリリー（註：サウジアラビアにある砂漠の名）で、

アラブの王や王子に。

さて、ファラーデイスは、ズイカロン・ヤアコブにあるワイ

ン醸造所で働く、

若者たちのおかげで残った。

ワイン醸造所で働くファラーデイスのアラブ人のことを、

我々が不快に思う必要はない。

道を切り開いたのは誰だ？ ビルを建てたのは誰だ？

シエルターを建てたのは誰だ？ 要塞は？

綿を植え、それを収穫し、ラグダーンやバスマーンのご主人た

ちが着飾るために、縫合したのは誰だ？

（註：ラグダーン、バスマーンはヨルダンのハシム王家の

王宮の名）

イスラエルの名高きアッター工場で働いたのは誰だ？ アラブ

以外にいます？

アラブ民族協会やら、アラブサミットのメンバーたちが、櫛の

歯みたいにお揃いになるよう、制服をアッターで眺えると言わ

れるほどまでに？

アラブが非アラブに優越するのは、……王やクーフイーヤや

アツカール、騎士道やアラブ道の象徴だけ。

アラブ人の血が騒ぐ時、何が起ころうというんです？

……何も。

その時には、あらゆる外国からの輸入品を呪うだけ。

ただし、王政やクーフイーヤ、ワイン醸造所、飛行機と車を除

いて。

それからドルと写真と、写真用のボーズ、手の平への接吻や皇

太子、労働者抑圧と搾取、日々の糧や悪行にも目をつぶりま

しょう。この「万事に備えよ」って時代には。

「戦争に備えよ、平和に備えよ」「王様万歳」、とまでおっしや

るんだから。

イスラエルで、誰が土を耕し、植えたんですか？

イスラエルに残ったアラブ以外にいます？

彼らの自伝も、彼らが強奪された記録も、残されていない。連

中が彼らを海に投げ込んでいたさなかには。

一度ヤアコブが私に話したのですが、ズイカロン・ヤアコブの
アシユケナージが仕事の中に言い争ったと。

土曜日に妻を悦ばせることは許されていることか、あるいはア
ヴォダー、つまり土曜日には禁じられているところの労働なの
か？

これは娯楽なりや、労働なりや？

で、ラビのもとにはせ参じて尋ねてみた。

「娯楽でしょうか、労働でしょうか？」

うんうんと考えた揚げ句、ラビは言った。

「それは許された娯楽である」

どうしてですか、と聞いてみた。

ラビ曰く、もしこれが労働であるならば、ファラーデイイスの
アラブ人を連れてきて、その労働をさせねばなるまい、と。

私もヤアコブもブブツと笑いました。

ヤアコブはアシユケナージを憎んでいるから、笑った。

私は、彼が笑ったから笑ったんだ。

こうして、ファラーデイイスは破壊されずに残りました。

一方でジスル・ザルカー。

これにはさらに、話があります。

一九四八年に軍が入って、この村を占領しました。

イスラエル軍は、どうしてここを鎮圧しなかったんでしょう？

軍が村に入った時、村は空っぽだった。

軍人たちは、村の住民は逃げたのだと考えた。

しかし彼らは、逃げたのではなかった。

どこにいたか、お分かりで？

ワニ川で、魚釣りをしていたんです。

私は、彼らがどうやって川に入るか、見ていました。

日没前のことです。

列になって並び、立っていた。

男が前に、女は後ろに。

手を川の中に入れて、魚を見つけると、すくい取る。

みんな同じ動きをしていました、一人の少女を除いて。

金髪で緑の目をしている。

一人で岩の上に立ちすくんでいました。

村の住民のように魚を取らない。

誰かが魚を掴むと、彼女の唇は動き、震え、目からは涙がこぼ
れる。

彼女の目に私が見たのは、困惑と孤独、そして北部風のダブカ

(註：パレスチナ農民のステップ・ダンス)。

私の視線は彼女の目に向かった。

彼女が私を見て、視線が合いました。

彼女の周りの者は、見ていませんでした。

ジスル・ザルカーのガギが一人、いつも私の隣に座っていた。

ぬかるみに釣り竿を仕掛け、それを引いて座っています。

私は彼に、聞いてみた、どうしてその娘が村の住民と一緒に魚を捕らないのか。

そのガキは言いました。

「あれは孤児だよ、おじさん。ここに住む難民なんだ。

あれは破壊されたタントウラの出で、彼女の親戚はここに住んでいる。

白痴女さ。放っておきな。

ちよつと笑ってるかと思えば、ちよつと泣く。それから本を読み続ける。

放っておきな」。

ジスル・ザルカーに住んでいる彼女の親戚は誰かと聞くと、逆に私に尋ねてくる。

次の週の土曜日。

魚を捕りに行くと、例のガキが、大勢のガキと一緒に現れた。

そいつがみんな、私に石を投げ始めるじゃないか。

ワデー・ニスナスにある、自分の家に戻った。

部屋に閉じこもって咳いた。

ああ不運なお前は、前にも後にも進めない。

タントウラの娘とお前の間には、ユアードの時と同じことが起きた。

凍りついたようになって、座ってました。

ドアが叩かれたかと思うと、ヤアコブが突然入ってきた。

「お前、ジスル・ザルカーで何をしていた？」

「魚釣りに行ったんですよ、禁止なんですか？」

「村の娘たちをどうしたいのだ？」

「え!! あの娘が共産主義者だなんて、私は知らなかったんです」

ヤアコブがふーつと笑い出したので、私もそうしました。

「ああいう、砂や暗闇や蜘蛛の糸の向こうに埋もれた村に、共産主義者が生まれる危険はないさ」

「蜘蛛の糸というのは？」

「あの連中は全員、一族で、蜘蛛の糸のように結びつき絡み合っている」

「でも、タントウラ出の娘についてはどうなんです？」

「あれの本名はバーキヤと言ひ、彼女の周辺については危険はない」

ヤアコブは、彼女が共産党に近づくことはなからうと言ひ、私を彼女と結婚させようと約束しました。

そして彼女の家族を再統合してやろうとも約束してくれた。

私は夜の睡眠を断ち、アラブ人労働者の家庭訪問を開始した。彼らはハイファアの建設現場で働いており、夜はハイファアの建設現場で眠ります。

眠っている彼らを起こしては、反共産党の洗脳をします。朝になると、うたた寝している私を放ったまま、糧を得るために彼らは出かけます。

こういうふうであった次第。

そうやって第一回国会選挙に至った。

一九五一年のある日、ヤアコブが私の事務所にやって来ました。

「良かったじゃないか、イブン・ナハス。良かった！」

「何が良かったんです？」

「共産党が、ジスル・サルカーで一六票を取った。

我らが『大物』は、共産党の根を断つために、お前を送り込むことに決めたのだ」

「どうやって？」

「お前をバーキヤと縁組みさせるのだ」

そしてはや一ヶ月。

私はバーキヤと縁組みさせてもらった。
床入りの夜。

♪いらっしやい、可愛い子、まあ素敵

♪花よ花、天国みたいな気分

♪立って広場にお行きなさい

♪花婿さんをご覧なさい、何て御立派な

♪あの輝き、目の輝き

「おお、我が心、我が人生の伴侶よ」

「ちょっと待って、サイド。愛してるわ。

あなたが私を愛してくれているのと同じくらい。

私にとつてあなたは今や、この世でたった一つの希望だわ。

だけど、私の秘密を話しておかないと。

私たちの村タントウーラに、黄金がいっぱい入って閉じられた鉄の箱があるの。

お母さんとおばあさんと、私の姉妹の黄金よ。

お父さんが、死ぬ前に教えてくれた。

戻って、その箱を手に入れなければ。

自分の子どもたちが身をかがめて生きるのを見たくない。

私は自由に呼吸することに慣れてしまったの。

ねえあなた。『大物』や政府のことを考えずに、自由に呼吸することなんて出来る？」

私は突然、この国にはこういう人間がいるということを知ったんです。

政府とか、政府の人間たちを怖れない人間が。

間違いなくこういう人間には、その人自身のタントウーラや、鍵のかかった黄金の箱が存在する。

このとき、タントウーラや鍵のかかった黄金の箱は、私にとつてもそういうものになった。

タントウーラと黄金の箱のことを、私はいつも考えるのです。

ほどなくして、ワーデー・ニスナースの家は、手狭になりました。

びつたりの家をハイファの山の上の、
ツイヨースト通りに見つけました。

支払いをして、すつからかん。

車を借りるお金はなくなった。

無人になったアラブ人住宅から持ってきた道具を引っ張って、

ガラガラと進みます。

そうさ、歩きましたよ。

私の脇を車が止まって、そこから男が降りてきました。

彼の名前は「悪の運び屋」。

ペンと紙を見せて、「我々は……」と言う。

やつこさん一人なのに。

「我々は不在敵対者財産の監視人、すなわち
ラフーシユ・ナートウーシユである」

私には分かりませんでした、そのフーシユ・マルトウーシユと

やらが何を意味するのか。

「私はヤアコブの友人なんですよ」

「いやいやいや、私は、このモノがお前のモノであり、

お前が盗んだわけではないことをはっきりさせる証明書を見た

いのだ。

これらのモノは、お前の所持品であり、盗んだのではないと」

「兄貴。自分のモノが自分のモノであって盗んだモノではない

という証明書など、

誰が持っていますかね」

「いやいやいや、これは国家の所有物、マルクーシユ・ナー
トウーシユである」

「叔父貴。我々は誰だって、フーシユ・マルトウーシユですよ」

で、ヤアコブがやって来るまで放免してくれませんでした。

放免されたものの、おさまらなかった。

このフーシユ・マルトウーシユとやらが、私を一人置き去りに

することでしょう。

夜にドアが叩かれるたび、

私は飛び上がって、ホーシユ・マルトウーシユが来た、と言いま

しました。

妻のバーキヤがタントウーラと箱の話を私にして以来、

隣人がドアを叩き、自分の妹の婚約式に招待してくれようとし

た時でさえ、

バーキヤも私も飛び上がりました。

「連中は秘密を暴いたぞ！」

「いいえ、そんなことはないわ」

「暴いたのだ」

「いいえ、暴いちやいないわ」

暴いた、暴かない

暴いた、暴かない

暴いた、暴かない

暴いた、暴かない

(註……ここには性的な含意もある)

そうこうするうち、彼女は妊娠して、男の子を産んだ。

彼女は自分が産んだ子どもに、彼女の父親の名前をとって、ファトヒと付けようとした。

そこへ「メガネの大物」がやって来た。つまりシンベート、モサドの「大物」。

「ファトヒ……。ファタハはいかん」
内務省へ一目散。

子どもをファトヒからワラーヒに変えた。

さらにイスラエルのアラブ人が産児制限をすれば、国家に対する忠誠の証の一つになると知り、ワラー以外の子どもを作りませんでした。

アラビア語の諺で「ゆつくりには安らぎ、急いで後悔」と言うように、息子のワラーが十四歳になるまでじつと我慢した。水も滴る美少年になりました。

そしてタントウラーの海岸に、彼を連れて行つたのです。岩の上に立たせ、彼が釣りをする時にはしっかりと抱きかかえ、彼の服を脱がせ、タントウラーの破壊された家の方へ泳いだ。

妻のバーキヤが話してくれた洞窟に潜りましたが、色とりどりの魚以外、何も見つかりません。

息子のワラーが私を呼んでいるのが聞こえました。

「何を探しているのさ、パパ？」

「黄金の魚だよ」

「それを見つければいいの？」

「そうだ。もしお前が質問攻めをしなければ、そしてパパがもうちよつと深く潜れたら」

「どうして。パパの前にそれを見つけた人がいるの？」

「見つけた人々がいると聞いたよ」

「もし見つけたら、僕たちはどうするの？」

「他の人たちがしたようにするんだ」

「もう、どうしてどうして言うな」

「さあ、戻ろうよ、パパ」

どうしてワラーが、私たちが海岸から出るのを急ごうとするのか、一度だつて分かつたためしはありませんでした。

ある日、彼は言いました。

「パパ、どうして黄金の魚を探している時、誰かが見るんじゃないかって心配するの？」

「うーん、誰かがパパよりも先にそれを見つけないようにさ」

「じゃ、もしパパが黄金の魚を見つけたら、政府はそれをパパから取り上げようとするの、おじいさんやおばあさんからタントウラーの村を取り上げたみたいに？」

「誰がその話をお前にしたんだ？」

「パパかな？」

「お前の母親だ。あの女の父親が、あいつを呪えばいい」

その夜、私と妻は、ワラーに聞こえないよう、ささやくような

低い声でもって言い争いました。

妻がワラーを理解しているということは、よく分かった。

彼は誰のことも信用していない。

友だちが誰もいない。

誰とも話さない。

誰とも連れ立って歩かない。

誰のことも信用していない。

妻が彼のことを理解しているということは、分かりました。

くだんの秘密は、誰にも言わないほうがいい。

ところがワラーは、忍び足で入って来ていたのです。

「静かにして。ヨーグルト売りが来たよ。」

気をつけて、あれはCIAで働いているって話じゃないか」

ああ。

実際、諺に嘘はない。

息子が大きくなったら大人として扱えと言われます。

美しい娘と結婚した農夫みたいに。

話はこうです。

美しい女と結婚した農夫がいた。

とても嫉妬深くて、人々の目を警戒し、大きな箱を持ってきて、

彼女をその中に入れた。

箱には大きな鍵穴をつけた。

それを背中に背負い、彼がどこに行こうと、娘は箱の中。

ある日のこと、自分の土地を耕していた。

箱は背中の上にある。

その時彼の近くを通ったのが、バドル・ザマーン王子。

王子は奇妙に思われた。

「農夫よ、お前の背中にあるのは何だ？」

「おらの嫁さんが入ってるだよ」

「降ろせ、見てみたい」

気の毒な農夫は、自分の背中から箱を降ろしました。

開くと、妻は彼の隣家の男と同衾していた。箱の中で。

これがつまり、東洋的想像力というものです。

この東洋的想像力というものがなかったら、この国にはアラブ

人の姿はないでしょう。

一九四八年の後、一日だつてあり得ないでしょう。

イスラエルのアラブ人が独立記念日に何をしているか、ご覧な

さい。

イスラエル国旗を掲げているのを見てください。

祝日の一週間前から、祝日の二週間後まで。

旗でもってアラブ人のドライバーを見分けることが出来ます。

自分の車に大きく旗を掲げているのが、アラブ人です。

東洋的想像力に満ちていた頃のある時、つまり軍事政府時代の

こと。

私はナザレの軍事政府裁判所にいた。

法廷から姿を出さずに、子どもの声が私を呼んだ。

「おじさん、おじさん、裁判官があんたをお呼びだ」
行ってみました。

「裁判官さま、こんにちは」

すると子どもが飛び上がって言った。

「これが僕の父です」。

何と言ったらいいものか、呆気にとられるばかり。

裁判官は書類を読んで、私に罰金50リラの判決を出した。

または懲役三ヶ月だと！

軍事政府の許可証なしにハイファに旅行した子どもの「父親」
が私だから。

出て行って、絞め殺してやるうとこいつを追いかけた。

「いいじゃないか……、東洋的想像力ってやつさ」

東洋的想像力。

しかし私の一人息子ワラーは、第二の道を見つけました。

自分の東洋的想像に没頭している。

私と妻が、例の箱やタントウーラやひそひそ話や隠し事にかか
ずらっている一方、ワラーは大きくなって、一風変わった若者
になりました。

一言だって話さない。

まるで口を縫い閉じたように。

しかしひとたび彼が話すと、私はその言葉を怖れたものですが。

一九六六年の秋のこと。

私は書斎にいました。

すると車の音に続いて、軍靴の響き。

私の前へ、武器を持った男がやって来ました。

その先頭には、眼鏡をかけてしかめ面をした「大物」が立っ
ていた。

ヤアコブは頭を下げている。

私の足は恐怖で麻痺していました。

私の目はかすみました。

それから見えてきた、たくさんの頭、頭……。

揃いも揃って、全開の雄叫び。

それから黒いカービン銃。

揃いも揃って、叫んでる。

この、売女の息子がー!!。

吹き出してしまった。普通の人はこんなふうには言わぬもの。

わけがわからないまま、私は全員の足の下。

フットボールのように蹴りつける。

朦朧状態から目覚め、呪いの言葉から、理解した。

私の一人息子ワラー、あの、猫に自分の夕食を食べられても構

わぬような子が、フェダーイー[■]になってしまった、と。

私には責任がある。

彼の母親と言えば、本当は家族と一緒に追放されていたはずの、

タントウーラ出の女。もちろん彼女にも責任がある。

ヤアコブにさえ責任の一端はある。

なにしろ彼は、東洋風の食事に夢中で、国家への義務を忘れたから。

ともかく我々は皆、連中の家を破壊すべく、「大物」の命に服し、国家の命に服して来た。

しかし、彼らこそが我々の家を破壊するのだ。

国家はどうやってその権利を守るべきか、知っている。

中傷と呪いと悪夢のごたませの中から、ともかくも分かったのは、息子のワラーがフェダーイーの細胞を組織し、タントウーラの洞穴に隠れているということでした。

「イブン・ナハス、我々がまずお前のところに来てやったのは、お前に尽くしてやるためなのだ。お前が我々に尽くしてくれたように。

立て。あいつの母親を連れて、タントウーラの洞穴に行け。

お前の人生も洞穴みたいになっちまわないうちに。

降伏するよう、奴を説得しろ。

母親と父親を憐れめと、奴に言いなさい」。

皆さん。

自分の息子をなくした者以上に、息子というもののかげがえのなさを知っている者があるでしょうか。

私は両足を止め、そのまま固まっていたかった。

私の足は、私を運ぼうとしない。

二人の兵士が立ち上がり、私に椅子はどこかと聞きました。

私を抱え、ヤアコブの車に私を乗り込ませた。

ヤアコブが車を運転した。

事務所から家に着くまでの、道のりじゅう、彼も私も無言であつた。

妻のパーキヤがベランダから見下ろして、私が兵士と一緒にいるのを知り、流す涙はとめどなし。

下に降ろされて、彼女は私の隣に座らせられた。

私が彼女の涙をぬぐうことはありませんでした。

タントウーラの海岸に着いた。

太陽が沈みかけていました。

兵士たちは遠くで立ち止まり、洞穴を囲みました。

私と妻のパーキヤは立ったままでした。タントウーラの洞穴の前で。

「座って頂戴、サイド。私があの子に乳を飲ませたのよ。

私があの子と話すわ」。

私は壁の廃虚に寄り添って座りました。

海の方を見やりましたが、海は見えませんでした。

沈んでゆく太陽を見て、私自身も沈んでいく心地。

一人きりになったみたいに感じた。

妻のパーキヤは近づきました。一步、そしてもう一步。

「いい子、ワラー。撃たないで、お母さんよ。

抵抗なんかしても無駄よ。あんたは見つけられたんだから」

「どうやって?」

「連中があんたの隠れ場所に私を連れてきたのよ」

「僕は隠れちゃいないよ。僕は武器を持っていてるんだ。

あんたたちの隠し事に飽き飽きしたから。

そこにいるおばさん、あんた誰?」

「あんたのお母さんよ、ワラー。」

母親のことを知らないふりする子どもがあるかい?」

「僕の母さんが、連中と一緒にやって来たわけかい?」

「こーだよ。いい子、返事をして。お母さんと、お父さんに。

お父さんは壁の残がいのところに座ってるよ。どうして何も言わないの?」

まだ話の最初だよ、いい子」

「どうしたいんだよ、ママ?」

「私が来たのは、あんたが自分から武器を捨てて降伏するためなのよ」

「どうして?」

「あなたのお父さんに憐れみを持ちなさい。

私のことも憐れに思っちょうだい、ワラー」

「ははははは」

「あなた、笑ってるの。」

あなたを身ごもったお腹を笑おうっていうの」

「違うよ。僕が笑ってるのは、この連中がどうして憐れみのことなんか話すようになるんだと思うからさ。」

連中は誰のことも憐れみはしないよ。

だからあんたは連中のことを怖れてるんだね」

「違うわよ、坊や。私はあなたのことを心配してるのよ。

坊や、いい子。おいで。武器を捨てなさい、坊や。出て来なさい」

「連中と一緒にやって来たおばさん。僕にどこへ出て行けと云うんですか」

「広い、空気のあるところに出なさい。その洞窟は狭いから、窒息して死んでしまう」

「窒息するだつて? 僕がこの洞窟に入ったのは、息を吸うためなんだ。」

一度でいいから僕の人生で自由が欲しいよ、ママ。

小さかった時、僕が泣くと、みんなが僕を黙らせた。

大きくなってから、僕はあんたたちの会話の中で言ってることを探った。

ひそひそ声以外に何も分からなかった。

学校では皆が気をつけると言った。

あまり話すな。

人を信用するな、友だちになるな。

人と連れ立って歩くな、人と話すな。

先生のこと、担任のこと、友だちのことを僕が言うと、彼らに

気をつける、とあんたたちは言う。
スパイが置かれているからと。

僕がタントウーラの話聞いて、連中に呪いの言葉言うのと、
気をつける、あんまり話すんじゃないとあんたたちは言った。
連中が僕に呪いの言葉を言っても、気をつける、あんまり話す
んじゃないとあんたたちは言った。

朝僕が起きると、僕が眠りながら寝言を言っているとあんたが
文句を言いに来た。

気をつける、あまり話すな。

気をつける、あまり夢を見るな。気をつける、気をつける。

僕は気をつけたくないよ。

この洞穴は小さい。でも、あんたたちの人生より広いよ、ママ。

ここは塞がれている、でも自由への道なんだ」。

「死ぬって？ 死ぬことが自由へのたった一つの道だと言う
の？」

「僕はあんたたちのことを恥じるようになって、
周りの人より頭を下げてるよ」。

「私たちのことを恥じているって？ ワラー？」

「私たちは生きていくために、気をつけてきたのよ。
成長するために、生きるために。」

出てきて、生きましようよ」

「どうしてそんなことが出来るんだ」

「ワラー、私たちはあなたの敵じゃないわ」

「あんたは僕の味方じゃない、ママ」

「気をつけなさい、いい子」

「それをまた言ったね。

気をつけなさい、いい子。気をつけなさい、いい子……。

もう僕は自由になったんだ」

「聞いて、ワラー。もしも私たちが自由だったら、私たちはお
互いに、こんなに違ってなかったでしょう。」

あなたは銃を持たなかったし、私だってあなたに気をつけると
は言っていないでしょう。」

私たちは勝つでしょう、でも今すぐにじゃないのよ」

「どうやって勝つてのさ？」

「自然と同じよ。夜の後には明け方が来る。」

「あなたが今やっていることに、誰も我慢できないわよ」

「じゃあ僕は我慢するさ」

「ねえ、いい子。若者の耳元に差したバラのつぼみほど、美し
いものはあるあるかしら？」

「でもバラのつぼみは、折った後は枯れて死ぬんだ」

「ワラー、あなたを抱かせてちょうだい」

「いつになったら終わるの、ママ？」

「我慢するのよ、ワラー」

「これまでずっと、我慢したよ」

「もっと我慢しなさい」

「我慢できないよ、僕の周りには、洞穴しか、暗闇しか見えな
い」

「洞穴にいるからでしょ？」

「僕の人生すべて、洞穴だ」

「じゃ、太陽の光のもとに出なさい」

「太陽の下で、どこに僕の場所があると言うのさ?」

「この世は素晴らしいわ。人は太陽の下で自分の場所を見つけ、自由になるのよ」

「あーあ、ママ、あなたたちと一緒にじゃ、僕の人生には何の意味もないんだ。」

無意味になったおかげで、生きること死より安物になったんだ。」

「あなたのところにある武器は何?」

「マシンガンさ。箱に入れて持って来たんだ。」

ママ、連中をかばいやがって。僕の愛情を盾にしているんだね。」

「ワラー、あの箱の中にもっとマシンガンがあるわよ」

バーキヤが海に沈んでいった。

兵士たちが攻撃した。

銃撃が続き、私は酔っ払いみたいになって、つつ立ってしまいました。

どうなったのかわけが分からない。

ただ、「大物」が叫んでいるのが聞こえました。

「撃つのは好まん。連中には良くしてやるべきだ。」

向こうに沈んでいったぞ。あっちだ。」

突如、大きな探知器と潜水人が現れました。

その時ヤアコブが来て、私の頭を自分の肩へと押し込め、私を

車の中に引っ張った。

気づくと、ハイファの我が家の側にいました。

次の日私は、仕事に出なかった。

人は誰かのために働きます。

これから、誰のために働くのでしょうか? 誰のために?

そこへ、ドアを叩く音。

ドン、ドン、ドン。

「おはよう、サイド」

「ようこそ、ヤアコブ」

「聞け、サイド。仕事には戻らなくてはならない。」

しかし、昨日起きたことは完全に忘れろ」

「よろしい、君の好きにしてくれ。もし自分の妻と子どもを殺されたら、忘れられるかい? 私にどうやって忘れろと?」

「誰がお前に、殺したと言った?」

あなたの奥さんと子どもを捜索したが、見つからなかったのだ。

今日だって探したのだぞ。だが見つからなかった。

つまり、彼らを助けようとしたのに、彼らは逃げたのだ」

ヤアコブは確かに良い人間で、私のことを気の毒がりました。

彼が私に、同情してくれているのは分かった。

だが彼は話しながらなかったし、私も信じなかった。

例の箱とタントウーラのことを私は口にしなかった。

降伏せずして死なんと彼らが決めたのは明らかだ、と私は心の中でつぶやいた。

あの二人に何が起きたのか、自分は知らないと思うことにしました。

彼らが生きているという望みを持つことは、死んだことをはっきりさせるよりも、まだだったからです。

希望の余地がなかったら、人生は何と狭苦しいことか。ある日から私は、タントウーラの海岸に再び行くようになりました。

魚釣りをするふりをする道具を持って、あの岩の上に立ちます。ワラーがその上に立っていた、その岩です。

魚を釣るふりをして、心の中で彼に呼びかけます。きつと、聞いてるよな。

彼が聞き、ふと現れると思うと、血がさーっと引いてゆく。おい、おい、おい、ワラー。

ああああああ、ワラー。
本当に、ああああ、ワラー。

おい、出てこい、ワラー。
お前が恋しいぞ、ワラー。

気がつくくと小さなユタヤ人の子どもが私の隣にいて、言いました。

「おじさん、おじさん、何語で話してるの？」

「アラビア語だよ」

「誰と話してるの？」

「魚とさ」

「へええ、魚はアラビア語分かるの？」

「アラブの友だちだった、大きな魚はね」

「小さな魚は、ヘブライ語が分かる？」

「ああ、ヘブライ語もアラビア語も、どの言葉だつてさ。海は大きくて、国境はないのさ」

「オーヴアーヴオイ」

「オーヴアーヴオイ」

「ヤー・ワイリー」という意味です。

「イツィーク、こつちにおいで」

子どもの父親が呼びました。

「パパ。パパ。この人、スレイマン王だよ」

(註：スレイマン王(旧約聖書の中のソロモン王)は、動物の

言葉を解すると伝承されている)

私は小さな魚をつかんで、彼にあげました。

「これを持って行きなさい」

「これ、ヘブライ語話す？」

「いや、まだ小さすぎるから」

大きくなってヘブライ語を話せるように、と子どもは魚を海に放りました。

ああ、子どもがみな、小さいままだったら。

心の中で、そう思った次第。

二日後、私は買い物をして、ワーディ・ニスナースに行きました。二人の若者がいて、一人が他方に呼びかけているのを聞きまし

た。二人の若者がいて、一人が他方に呼びかけているのを聞きまし

た。二人の若者がいて、一人が他方に呼びかけているのを聞きまし

た。二人の若者がいて、一人が他方に呼びかけているのを聞きまし

た。二人の若者がいて、一人が他方に呼びかけているのを聞きまし

た。二人の若者がいて、一人が他方に呼びかけているのを聞きまし

た。二人の若者がいて、一人が他方に呼びかけているのを聞きまし

た。二人の若者がいて、一人が他方に呼びかけているのを聞きまし

た。二人の若者がいて、一人が他方に呼びかけているのを聞きまし

た。二人の若者がいて、一人が他方に呼びかけているのを聞きまし

た。二人の若者がいて、一人が他方に呼びかけているのを聞きまし

た。二人の若者がいて、一人が他方に呼びかけているのを聞きまし

我がシートの高貴さは、我が忠誠を証す好機。そこへ来たるはヤアコブ、「何をしてる!! 降旗せよ、マヌケ者め!」

「アナウンサーがそう言ったんです」

「アナウンサーは、西岸のアラブ人に対して言ったのだ。お前はここハイファにいながら、どういふつもりだ」

「良過ギタルハ、良カリ」

「つまり、お前はハイファを被占領地とみなし、国からの分離を望んでいるのだな」

「そんなこと思いつきませんでした。それはあなたの解釈です」

「お前が何を思いついたかなんてことは、どうでもいいのだ。問題は、我らが『大物』が、何と言われるかだ」。

彼は、お前は白痴じゃないはずだと言う。それなのに白痴のふりをしている。

この木偶の坊は忠実ではない。でも忠実なふりをしている。

この木偶の坊は国を愛していない。しかし愛しているふりをしている。

どうして、よりによってユアードを愛した? なぜ、よりによってバーキヤと結婚した? なぜ、よりによってワラーを生んだ?

「どうして『大物』は、聞いてくれなかったんでしょう？」

「どうして私は、よりによってアラブ人に生まれたんでしょう？」

「どうして私は、よりによってこの国と出会ったんでしょう？」

「俺と一緒に来て、『大物』に聞いてみる」

彼は私を屋根から降ろしました。

私から旗と箒の柄を奪い、私をここに連れて来た。

その日から私はここにいます。

皆さんもここにいます。

私たちみんな。

終わり